

【2011 年度第 1 回研究会発表要旨】

「土人」から「先住民」へ —現代のアイヌ民族に関する文化人類学的考察

石原真衣

1982 年の国連における先住民に関する作業部会の結成を契機に、国際社会というアクターが表舞台に登場した。以降、アイヌ民族の自己認識や自己表象は、それ以前とは異なる様相を呈するようになった。アイヌ民族は、様々な社会背景や時代背景のもとで、様々なアクターの相互影響を受けて「先住民」となったと考えられる。現代を生きる「先住民」を理解するために、国際社会が介入する以前の彼らの自己認識や自己表象を検討し、かつての「滅びゆく民族」や「土人」から今日の「先住民」へと変貌する過程を考察する。

これまで、アイヌ民族に関する研究は、近代日本における「少数民族」として、様々な領域から研究が行われてきた。近年のアイヌ民族を取り巻く状況として、2007 年国連総会本会議による「先住民族の権利に関する国連宣言」の採択、2008 年、日本において衆参両院の本会議で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」の採択が挙げられる。「先住民」とは、分析的・法的カテゴリーであるとともに、国際言説に乗って自己のアイデンティティを構築し、国家を超えたネットワークを組織し、展開していく人々である（窪田幸子『「先住民」とはだれか』世界思想社、2009）。この定義からも理解できるように、アイヌ民族はこれまで、国民国家に包摂された「少数民族」として研究されてきたが、今後、国境を越えるアクターである「先住民」として、国際的な枠内において研究することが求められている。

アイヌ民族の自己認識、自己表象を解明するために、社団法人アイヌ協会による機関紙『蝦夷の光』（1930 年～1933 年、創刊号～4 号）、『北の光』（1948 年、創刊号）、『先駆者の集い』（1963 年～2011 年 5 月 26 日現在、創刊号～122 号）を検討する。1930 年に刊行された『蝦夷の光』において、当初使用されていたのは「滅び行く民族」、「土人」という表象であった。その後 1982 年までには、「滅び行く民族」、「土人」、「保護民」、「原住民」、「先住の民」、「少数民族」、「先住民・先住民族」が、その時代の政策や、社会における言説と呼応して併用されていた。以上の調査結果から、国内における社会背景や言説が、アイヌ民族の自己認識や自己表象に影響を与えており、表象も画一的ではないことが解明した。

「先住民」は単に *indigenous* の訳語あるいは造語ではなく、新たな「運動」に対応し、「運動」のなかで人々が集成的にある属性を付与する言葉になった（内堀基光「先住民の誕生」『「先住民」とはだれか』世界思想社、2009）。『先駆者の集い』の中で 1987 年まで国連や ILO などの国際社会というアクターは登場しておらず、この間、「先住民・先住民族」、「少数民族」、「ウタリ」、「先住者」という表象が、併用されている。重要な契機は、1987 年特集号(43 号)においてであった。この年における国連の国連先住民会議への参加以降、1993 年の 60 号まで、48 号から 50 号のみを除いてすべての号において、国連関連の記事を掲載している。また、国連などの国際社会や、他の先住民と積極的にネットワークを構築し、表象も「先住民」に統一された。アイヌ民族は、1982 年に国際社会というアクターが登場してから、1993 年の「世界の先住民の国際年」の間において、「先住民」としての自己認識を確立させたことが明らかになった。

先住民研究において、「先住民」が、国際社会の介入、国家の政策との関連の中でどのような実践をしているか、という視点が求められている（高倉浩樹『「先住民」とはだれか』世界

思想社、2009)。現在における「先住民」としてのアイヌ民族の実践を考察し、内部の視点から民族誌的研究を行うことを今後の課題としたい。

(いしはら・まい／北海道大学大学院文学研究科 修士課程)

## 北海道の国際観光イメージの生成及び変容のメカニズムに関する文化人類学的研究 —「ポスト地震時代」の中国人観光の実態及び受け入れ対策を中心に—

周 菲菲

### 1 問題意識

近年、日本政府は「観光立国」の方針を打ち出し、日本国全体のイメージアップを図ろうとする国家の「イメージ戦略」を展開している。一方、現在の中国では、目覚ましい経済的發展に伴う中間層の所得の増大により、これまで「西側」に位置付けられてきた国家と地域のイメージを「自らの目」で確かめようとする強い願望が生じている。これを背景とし、世界における中国人観光の流動化が進んでおり、日本—日本産のものばかりでなく、日本のナショナルリティそれ自体までもその消費対象となりつつある。特に北海道は中国の人気映画に登場したため、ロケ地めぐりの旅は一時的なブームになっている。

しかし、日本は中国人<sup>1)</sup>にとって純粋な「西」ではなく、戦争を含む中国との長い交流の歴史を經り、密接な経済的関わりを持っているうえ、草の根レベルでの対日不信感が強い為、日本のイメージには錯綜たる政治的・経済的要素が絡んでいる。特に中華人民共和国では様々な法や条例上の規定により、厳しいインターネット検閲が行われ、中国版のツイッターやSNS等、特別なヴァーチャル空間が作られている。また、3・11 東日本大震災の後は、日本において消費することは高いリスクを伴う行為と見なされている。以上のように、日本にある北海道の地域イメージも断片化の作業途中であり、再構築されつつある。急激に増えてくる中国本土から消費者は、最大の消費額で世界中の注目を浴びている。従って、北海道が東アジアにおける「ブランド地域」としての地位を確立する中、地元のコミュニティによるイメージ（或いはローカリテ<sup>2)</sup>）の構築と発信は中国から大きく影響を受ける時代へと変わったと言える。

このような背景のもと筆者は、ローカリティの表象である地域イメージがどうやって構築され、変容するのか、そしてどういうふうにより帰性をもってローカリティに作用し、消費されるのかを考察していきたい。

### 2 研究方法

本研究では、中国で流通する日本のイメージを全体的に把握し、北海道の地域イメージの構築・消費のメカニズムを明らかにしたい。北海道の観光イメージの担い手は、JTB等の大手旅行会社、地域行政機関、地元民（ボランティアガイドが中心）等の他、中国人の身近にあるテレビの映像やインターネット情報、雑誌、アニメ、映画などの様々なメディアによって醸成された、切り取られて構成されたものがある。観光者がそういうイメージを確認し、消費する。更に現場のイメージを「おみやげ話」としてブログやSNS等で公開し、イメージを再生産する。

そこで、ここまでの文化人類学と観光学、社会学の先行研究を踏まえ、インターネットに流

通する観光イメージと観光消費の二点に焦点を絞り、中国人観光に関する現実を明らかにしたい。インターネットの普及による双方向性の情報コミュニケーション革命により、観光者は単なる顧客ではなく、観光を創り出す主体となりつつある。また、消費のエスノグラフィーは近年では多くの大手企業で実践されているが (Malefyt 2008: 202)、観光の場での応用は希少である。観光イメージの生成に力を持つ観光者に対し、北海道という観光地、更には日本全体に、好意や連帯の思いをさせるようなホスピタリティーを明らかにする。

なお、本研究の完成により、日本および北海道が直面する「安心・安全」イメージの崩壊と国際観光における困難に対処する上での人類学の視点からの一つの参照点を示唆できるだろう。

注：

- 1 本研究でいう「中国人」は、中華人民共和国（「本土」）の観光者を考察の中心にしたいが、比較の対象としてはと香港、台湾やシンガポールに在住する中国系といった広い意味での「中国系」の観光者も視野に入れたい。
- 2 ここでは、「グローバリゼーション」の中の「地域性」、またナショナル리티の構築とも深い関係を持つ「地域性」を示すために、ローカリティという言葉を用いる。

#### 参考文献

Appadurai, Arjun ed.

2001 *Globalization*. Duke University Press, Durham&London

アパジュライ, アルジュ

2004『さまよえる近代 グローバル化の文化研究』門田健一訳 平凡社

ボードリヤール, ジャン

1983『消費社会の神話と構造』今村仁司・塚原史訳 紀伊国屋書店

ブーアスティン, D. J.

1974『幻影の時代—マスコミが製造する事実』星野郁美・後藤和彦訳 東京創元社

Malefyt, Timothy De Waal

2008 Understanding the Rise of Consumer Ethnography. *Branding Technomethodologies in the New Economy*. Volume 111, Issue 2, pp.201-210

吉見俊哉

1998『メディア時代の文化社会学』新曜社

(しゅう・ふいふい／北海道大学大学院文学研究科 博士課程)

## 日本社交ダンス界における「競技化」の進展と商慣行

井上 淳生

本報告の課題は、日本の社交ダンス界において進められてきた「競技化」の過程を整理し、そのもとで現在いかなる商慣行が展開されているのかを明らかにすることである。日本にとって社交ダンスとは元来、西洋のものである。本報告を、社交ダンスが明治期に日本に紹介されて以降、どのような経緯で現在のようなものとして社会に位置付けているのかを、今後、人類学的に考察するきっかけにしたい。【本号「論文」として掲載】

(いのうえ・あつき／北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程)

## トナカイ飼育民ツアータンの生活変化 — “金” に翻弄されるタイガ社会—

西村 幹也

2000年ごろより外国人旅行客が増え、“ツアーチンセンター”が作られるなど組織的な観光業への適応を始めたトナカイ飼育民ツアータンは経済的に徐々に豊かになっている。そして、さらに、2009年秋には金鉱山採掘が始まり、特需が生まれるなど、彼らを取り巻く経済状況は、周囲のモンゴル人たちより恵まれはじめたように観察される。この近年の社会変化によってトナカイの飼育方法や営地選択原理などにどのような変化が起きているのかを考察してみたと思う。【本号「研究ノート」として掲載】

(にしむら・みきや/NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあ)